

# 文献に拠る殷起源問題諸説

## ―起源問題の本質を考える―

小川 誠

殷の起源に関しては、文献に依拠して古来より数多くの説がとなえられてきた。『史記』『六国年表』の西方説<sup>(1)</sup>はさておいても、王国維の東方説<sup>(2)</sup>、傅斯年の東北説<sup>(3)</sup>など、新中国成立以前から諸説が林立する有様であった。近年においては、発掘資料が飛躍的に増加したこともあって、純粹に考古学の立場からこの問題を解決しようとする風潮が強くなってきたが、それに後押しされるようなかたちで、文献史学界も再度活発化のきざしをみせはじめている。

そこで本稿では、近年に発表された、文献に拠る殷起源問題の主要な諸説を簡潔にまとめてみようと思う。殷の起源を探るにあたっては、甲骨、金文を含めた文字史料に頼る方法と、考古資料に頼る方法の二通りがあるわけだが、ここでは前者、とくに文献史学者の諸説を見渡してみようというのである。それにより、殷起源問題の現況の一面面をあきらかにし、あわせて今後の研究の取られるべき方向を、起源問題の本質を考えながら模索してみることにはしたい。なお、文献を使いながらも考古資料に力点を置いた考古偏重型の論考は、方法論の違い

からくる混乱を招く恐れがあるためここではとりあげないことにする。

### I 方法論上の問題

このような課題を扱うときにまず注意を払わねばならないのが用語の定義である。ここまで何気なく使ってきた「殷」、これはまさに本稿の主題であるわけだが、果たして何をもって殷と呼ぶのか、あるいは殷関連の用語、たとえば「殷王朝」「殷文化」等をいかなる意味で用いるのか、といった問題である。筆者は以前に考古学の立場から殷文化の成立を論じた際に、次のような定義づけを試みたことがある<sup>(4)</sup>。

「殷王朝」ならびに「殷文化」という二つの用語は明瞭に区別して使用されなければならない。「殷王朝」とは、政治的な概念規定であり、文献史料に記載された初代成湯（天乙）から三十代紂王（帝辛）に至る政治的王朝をさす。一方、「殷文化」とは、殷王朝の時代（Ⅱ殷代）に盛期をむかえた文化の総体をさし、これは、殷王朝の存立時期、政治領域を越えて存在しうるものである。ま

た、「殷代(の)文化」は、殷王朝の存続期間という時間的な制約をともなった(政治領域という空間的な限定は受けない)殷文化をさす用語として使用する。

基本的な定義内容をここでかえるつもりはない。しかし、文献と考古という視角の差異ゆえに生じる着目点のずれ、そのずれを了解しておくためにも、若干の補足説明が必要となってくる。ト辞および『史記』『殷本紀』に記された王系(とくに上甲微以降)が概ね一致することとは周知の事実である。そこには、夏の桀王を倒し殷王朝を興したとされる成湯からさかのぼって、十三の王名が記されている(契・昭明・相土・昌若・曹圉・冥・王亥・上甲・報乙・報丙・報丁・示壬・示癸)。文献から殷の起源を探る場合、これらの十三王とそれに絡む幾多の史料が、諸王や事跡の架空実在、虚偽真実云々のレベルを超えて重要な役割を担ってくる。ここから導くに、「殷」とはまず、帝嚳を父、簡狄を母として生まれた契にはじまり、武王克殷の対象となった紂王に至る諸王を中核とした概念であることが理解できる。そしてそこには、政治や経済に代表される日常的な側面、ならびに、祭祀や占卜などの形態をとって表現される多分に精神的な所産、すなわち非日常的な側面の両者が含意されるものと考ええる。普通「殷」は、このような幅広い意味を有する用語として規定されるであらう。しかし他方において、それは諸王中心の社会像を主体とした、その意味において、ある種の制約をともなう概念規定であることも同時に認めねばならない。したがって、右の引用文中で定義を示した「殷王朝」は「殷」に包含されるが、「殷文化」は「殷」(あくまで文献学上の)と共有されえない領域を有して

いることになる(たとえば地方の殷文化)。まさに、考古学の立場からすると、文献史学者が抱く「殷」概念は、社会の上部に視点を据えた、極めて観念性の強い産物といえなくもないのだが、実は、このような「殷」観念を共有するところにこそ文献史学の存立基盤がおかれているのではないだろうか。文献を拠り所とした起源問題の諸説を整理する際には、その土壌を十分に理解したうえで、「殷」「殷王朝」「殷文化」といった用語を慎重に使い分けていくことが必須となろう。

次に、論題にも使った「起源」という用語にかかわって若干述べておきたい。殷の起源といったとき、それが漠然と殷の淵源探求をさすことはあきらかであっても、果たして殷王朝の起源であるのか、殷民族(殷王朝を担った民族)の起源であるのか、殷文化の起源であるのか、また、殷王朝もしくは殷民族で統一されたとしても、どの先王の時代(どの先王期の民族)をもって研究の対象とするのか等々、肝心なところで不透明な部分が残されている。これは、本題の核心をつく問いでもあるのだが、研究者によって重点をおく箇所に微妙なずれがみられるのが実状である。統一がうかがえない現象自体は、各論考の筋立てが異なることにともなう当然の帰結として受け入れられても、それらを意識せずに同じ土俵で論じてしまうことは、混乱を避ける意味からも決して容認されるべきものではないであらう。

この問題に関しては、乾志耿・李殿福・陳連開の三氏が共同研究のなかで示唆的な考え方を示している<sup>⑥</sup>。三氏は次のように述べる。商族の発展過程は、①商先(商族の起源と初期発展段階)、②先商(上甲微(成湯))、③早商(成湯・武丁・商王朝前期段階)、④晚商(祖庚・帝

辛・商王朝後期段階）、⑤商後（周の武王が殷を倒し商の遺民を封ずるまで）、以上の五段階に分けられる。そして、起源問題を扱うにあたつては、①と②が重要視されるというのである。ここでは、商族という概念を用い殷の発展段階を跡づけているのだが、なによりも、殷王朝の起源と密接な関係を有する成湯以前の段階を「商先」「先商」の呼び名で分期することにより、起源問題を論じる際の時間的な枠組を提供しているところに着目したい。また、詳細は省略するが、彭邦炯氏も成湯以前の段階を、一段（契・冥・伝説時代）、二段（王亥・報丁）、三段（示壬・成湯）の三期に分け、商人早期の歴史をたどっている。そこでは、乾志耿氏等とは別の枠組を用いて初期商人の足跡が模索されている。ただし、彭氏は起源問題について直接ふれることはない。

ここで、再確認をしながら要点をまとめておこう。まず、文献から殷の起源を探索する場合、彼らのいう殷が諸王を中核とした概念であるところから発して、王系表上の成湯、これ以降を殷王朝と認めるわけだが、この成湯以前に名を連ねる諸王ならびに周囲の状況を調べることで、殷起源問題を解くための方法論と結びついていること、よって、彼らのいう殷起源とは殷文化ではなく殷王朝（もしくは殷民族）の起源をさしていること、以上の二点をおさえておく。これを踏まえるならば、成湯以前のどの先王の段階を選んで論を展開しているかの見極め、それと同時に、研究者自身がつけている時代区分（商先・先商あるいは一段・二段・三段等）への着眼と検討が不可欠であることは、おのずからあきらかとなつてこよう。とくに、成湯以前の時期をいくつに分けたかという区分法自体よりも、それらが時代を見据える

ためのひとつの枠組を提供し、各立論の土台となる可能性を内包している点を強調しておきたい。このような基礎的な部分における研究は等閑視されるきらいがあるものの、今後必ず、文献から殷の起源を探る際に大切な役割を演じていくものと思われる。<sup>8)</sup>

用語に関連する方法論上の問題はここでおき、最後に、文献史学者がよく使う史料を例示しておく。以下に示す引用文は、大多数の研究が自説を論じる際に参照する採択率の高い条ばかりである。しかも、多くの論考が、結論の如何にかかわらず、これらを最初の踏み台にして論を構築している。いわば、文献より起源問題を扱う際の基本文献とみなすことができる。次項では、これらをスタートラインとして論がどのように展開されていくのかを検証することにした。

#### 一 説話（玄鳥説話）関連

文献 a 『詩經（商頌）』「玄鳥」「天命玄鳥、降而生商、宅殷土芒芒。」  
文献 b 『詩經（商頌）』「長發」「有斌方將、帝立子生商。」

文献 c 『楚辭』「天問」「簡狄在臺、譽何宜、玄鳥致貽、女何嘉。」

文献 d 『呂氏春秋』「音初」「有斌氏有二佚女、爲之九成之臺、飲食

必以鼓、帝令燕往視之、鳴若謠諠。二女愛而爭搏之、覆以玉筐、少選發而視之、燕遺二卵北飛遂不反、二女作歌、

一終曰燕燕往飛、實始作爲北音。」

文献 e 『史記』「殷本紀」「殷契母曰簡狄、有斌氏之女、爲帝嚳次妃、

三人行浴、見玄鳥墮其卵、簡狄取吞之、

因孕生契。」

二 地名(王都) 関連(……は省略部)

文献 f (始祖契の王都①)

『史記』「殷本紀」「帝舜乃命契曰……封于商。」

文献 g (始祖契の王都②)

『世本(水經注卷十九所引)』「契居蕃。」

文献 h (昭明 of 王都)

『世本(尚書正義所引)』「昭明居砥石。」

『荀子』「成相篇」「契玄王、生昭明、居于砥石遷于商。」

文献 i (相土 of 王都)

『左傳』「襄公九年」「陶唐氏之火正閼伯居商丘……相土因之。」

『世本(太平御覽卷一五五所引)』「相土徙商丘、本顓頊之虛。」

## II 諸説の検討

検討に先立つて、まずは、文献に拠る殷起源問題の諸説をまとめた論考を紹介しておきたい。このような学説史的研究は、八十年代後半以降になって散発的に見受けられるようになってきた。たとえば、①陳昌遠「商族起源地望發微」『歴史研究』一九八七・一、②葉文憲「商族起源問題討論述評」『中国史研究動態』一九八八・四、③同「商族起源諸説辯析」『殷都學刊』一九九三・三、④宋新潮「近年来商族起源研究概述」『中国史研究動態』一九九〇・五、などの研究はそれを代表する。また、毎年ではないものの、『中国歴史学年鑑』八五年版、八七年

版、八九年版の「先秦史」の項目には、「商族的起源」「殷商源流」「商族起源」のような小項目が設けられ、簡潔な論評がなされている。

それらをみて気がつくのは、いずれの論考も、研究者が想定した起源地の違いによって諸説を分類したうえで、拠り所とした史料を紹介するという方法を採用している点である。具体的にいうならば、陳昌遠氏は東方説・北方説・西方説の三説(上掲①)、葉文憲氏は西方説・東方説・河北説・晋南説・遼西説の五説(上掲②③)、宋新潮氏は東北説・冀中説・西方説・東方説の四説(上掲④)に分けて、グループ化を試みている。このような、諸説を縦割りにしたまとめ方は大変合理的であるのだが、反面、文献史学特有な展開の仕方が十分にみえてこないきらいをもっている。そこで、本稿では、説話と地名からなる二本の柱を立てて考察対象とする諸説を整理し直し、同じ文献に依拠しながら異なる考えが生じてくるプロセスを客観的に描いてみたい。つまり、起源地ではなく根拠に主眼をおく(類似ではなく差異に焦点をあてる)ことによって、諸説を検討しようというのである。元来、文献史学者は、膨大な量の史料を渉猟しながら自説をまとめていく。筆者の方法に拠ると、その多くが割愛されることになるが、それを代償に主要部を浮きあがらせ、骨組みを明確化したいと考えている。そのほうが本稿の目的にもかなうであろう。なお、ここでとりあげる説話とは、いわゆる「玄鳥説話」のことをいう。これは、文献から殷の起源を探る際の有力な根拠のひとつになっているので、独立した項目として扱うことにした。また、地名は王都(後述のように初代三王の王都)を意味している。

1 説話（玄鳥説話）

玄鳥説話とは、殷王朝（始祖契）の誕生と玄鳥（燕）とを何らかのかたちで結びつけた説話のことをさす。たとえば、天が玄鳥に命じ殷王朝を誕生させたり（文献a）（文献aとは前項の最後で示した基本文献の符号である、以下同じ）、または、有娥氏の娘簡狄が玄鳥の卵を呑んで身ごもり契を生む（文献e）、そのような類の話である。この玄鳥説話を論拠のひとつとして利用している研究者としては、たとえば、王玉哲<sup>⑩</sup>、乾志耿・李殿福・陳連開、陳昌遠、李江浙の四氏（三氏と一組）をあげることができる。そこでは、『詩經』『楚辭』『呂氏春秋』『史記』のなかの一連の記載（文献a～e）が、基本文献（採択率の高い文献Ⅱ論考の出発点）となる。基本文献の採択状況は、表一「基本文献」の欄に示されるとおりである。そこからは、四氏ともに『詩經（商頌）』『玄鳥』（文献a）を使用していること、また『詩經』『長發』（文献b）、『呂氏春秋』『音初篇』（文献d）、『史記』『殷本紀』（文献e）は三氏、『楚辭』『天問』（文献c）は二氏によって用いられている状況があらわにされる。さらにここでは、甲骨や金文のような同時代に近い文字史料によって、殷王朝と玄鳥との関係が補強されている点も見落とせない（表一「甲骨・金文」）。その場合、第八代王亥の「亥」字、「商」字、ならびに殷代後期に属する「玄婦方壘（玄鳥婦）」が主要な材料となる。「亥」「商」の字形と鳥との関連性、殷代銅器に鳥関連の図象がうかがえることから、殷王朝と鳥とのつながりの強さを主張するのである。いずれにしろ、四氏ともに殷王朝の誕生と玄鳥が密接な関係にあったことは認めており、そこから殷人は、鳥をトートテム

とする民族であったとする共通の認識基盤が形成されてくる。

表一 玄鳥説話を取りあげた論考の論証過程ならびに結論一覧

氏名	基本文献	甲骨・金文	付加材料（根拠）	結論
王玉哲	a b c d e	「亥」字 「玄鳥方壘」	①左傳「昭公十七年」 ②論衡「吉驗篇」 ③魏書「高句麗傳」	東方説（山東Ⅱ祖地）
乾志耿 李殿福	a b × d ×		①呂氏春秋から直接導く。 ②東北民族の起源神話との共通性。	北方説（幽燕説）
陳連開				
陳昌遠	a × c d e	「亥」字	①山西南部に鳳鳥関連の地名が多い。 ②甲骨「商」字下部が穴居の形を呈する。	西方説（晋南説）
李江浙	a b × × e	「商」字 「玄鳥方壘」	①史記「秦本紀」	河北説（漳河説）

殷王朝が玄鳥説話ないし鳥をトートテムにもつ民族によって興されたとするならば、起源地は当然、それらが手掛かりとなって求められることになるだろう。問題の核心はここから先にある。実は、殷王朝の淵源は、基本文献と甲骨・金文史料に追加されるあらたな材料によつ

て決定される、すなわち、共通史料（基本文献と甲骨・金文）をもとにつくられた共通認識のなかに、独自の付加材料（表一「付加材料（根拠）」）を注入することによって各人の結論が導きだされているのである。したがって、結論のすべては付加物の内容いかに左右される。四氏の主張する起源地が、同じ基本文献を用いながら異なるのは、この付加された部分の違いに負うものといえよう。

表一をみながら具体的に説明したい。王玉哲氏は付加史料として、『左傳』『昭公十七年』、『論衡』『吉驗篇』、『魏書』『高句麗傳』中の記述を使用している。これらの諸文献はいずれも鳥にかかわる内容を有するのだが、そこに登場する諸民族（淮夷・夫余・高句麗）の居地と、同じく鳥と深い関係をもつ殷民族の故地を重ねあわせる、つまり、①鳥をトータルとする古部族は皆東方に住んでいた、②商族も鳥をトータルとしていた、③ゆえに遠古期の商も同様に東方の氏族部落であった、という論法に導かれ、殷王朝東方起源説がとなえられている。また、北方説（幽燕説）をとる乾志耿氏等は、基本文献である『呂氏春秋』『音初』の分析から直接北との関連性を述べると同時に、夫余、高句麗等、東北民族の起源神話との類縁性を指摘する<sup>⑮</sup>。一方、陳昌遠氏は、付加材料として地名と甲骨文字を使う。すなわち、山西南部に鳳凰山、鳳凰原などの鳳鳥をもって命名した地名が多く存在すること、甲骨の「商」字上部は鳥冠のかたちを、下部は穴居（山西南部を含む黄土高原にのみ可能な居住形態）のかたちをあらわしていることをもって、殷王朝西方起源説を主張する。最後の李江浙氏は、同じ玄鳥説話を載せる『史記』『秦本紀』を取りあげ、①商族と秦族は共通の祖先

を有すること、②共通の祖先である大費は人面鳥身であったこと、③商族と秦族は大費下の兄弟氏族として認識されること、④大費の故地は今の山東省曲阜、費県付近にあったこと、⑤秦族はそこから西に向かつて発展していったこと、等を論証し、これらを、後述の論考と結託して主張される殷王朝河北起源説の伏線として働かせている。

ここまでの説明で、基本文献ののつとつた共通認識のうえにたちながらも、そこに付加される新材料によって異なる結論が下されている現況をあきらかにしえたと思う。実際は、これに地名の考察が上乘せられるのであり、状況はますます複雑化の様相を呈していく。以降、これらについてまとめていきたい。

## 2 地名（王都）

始祖契から王朝の創始者成湯に至るまで居地をたびたび移動（八遷）したことは、たとえば、『史記』『殷本紀』の「自契至湯八遷」といった記述からうかがうことができる。しかし、具体的な遷都地について言及した史料は数少なく、ほかの関連史料をあわせても、諸王の居地を現在の地名で特定していく作業は予想以上に難しいものと察せられる。ここでは、そのような文献史学の現状を理解したうえで、起源問題とかかわりの深い、初代三王（契・昭明・相土）をめぐる論考を紹介する。基本文献となるのは、文献f・文献iに含まれる六点である。これらの諸文献からは、まず、始祖契の居地として「商」（文献f）と「蕃」（文献g）の二箇所が伝えられていること、第二代昭明は「砥石」から「商」へ移り住んだこと（文献h）、第三代相土は「商丘」（文献

i)を遷都地としていたことがあきらかになる。そして、多くの研究者はここを出発点とし、諸史料や先学の諸説を渡りながら殷民族の初期活動地を探っていく。したがって、玄鳥説話の場合と同じく、参照される史料や学説の別によって異なる結果が導かれてくる。それでは、はじめに始祖契の居地からみていきたい。

前述のように、『史記』『殷本紀』(文獻f)は、帝舜が契に命じて商に封じたことをいうが、「封于商」をめぐっては様々な疑義が提起されている。契の居地として「契居蕃」なる別の記載が存在すること(文獻g)、また、商は第二代昭明の二番目の遷都地としても伝えられること(文獻h)等の事情から、契の居地は蕃であり商ではなかったとする見方が成り立つのである。そしてこのような見方が多勢を占めている。ゆえに、論点はもっぱら商の意味論にしばらく、契の居地にかかわる議論は文獻gの「契居蕃」に譲られる場合が多い。<sup>16)</sup>

それでは、「封于商」の「商」はいったい何を意味していたのであろうか。王玉哲氏は、「天命玄鳥、降而生商」(文獻a)の事例をあげ、商は地名ではなく族名であったとの判断を下す。<sup>17)</sup>そして、甲骨文字中の「商」字上部が鳥冠とみなされることを根拠に、商字と民族(鳥をトテムに戴く民族)との結びつきを別の角度から主張し、自説の補強材料としている。商は元来自己の族名として用いられていたのが、後の時代になって商族の居地の名にも適用されるようになった、というのである。一方、李健武氏は、『史記』に載せられた封地に関する別の記載(たとえば、堯の子を唐に、舜の子を虞に封じると類)を参照する。<sup>18)</sup>そこでは、唐や虞はいずれも出身部族の名称であった。こ

のことから、同じ『史記』に記された「封于商」の商も族名であったと考える。要するに、当初、商は殷民族の族名であった、それが後代になって地名に転化した可能性は十分に考えられるのだが、とりあえず始祖契の居地としては否定されうるであろうというのが大勢の一致するところである。

次に、「契居蕃」(文獻g)の検討に移りたい。ここでは、事前の了解事項として二点を指摘しておく。第一点は、殷王朝の創設者である成湯の先祖が「亳」と呼ばれる土地に住んでいた旨の記載が存在すること(『史記』『殷本紀』等の「湯始居亳、從先王居」)、第二点は、「蕃」と「亳」が音韻のうえから通じていたことである。文献史学者は上記の二点をほぼ例外なく認めており、<sup>19)</sup>論はこれらの共通認識のうえにたって展開されていく。つまり、契の居地は「契居蕃」を最初の手掛かりとしつつも、実際は亳の地望の検討を通じて行なわれることが多い。これに加えて、亳と音韻が共通する漢字を含む歴史地理上の地名群(博水、博陵、蒲水、蒲陰、蒲吾、薄姑、番吾等)も勘案に入れられ、それらの総合的な探求のなかから殷民族の初期活動地が探られていくのである。しかしここでも、基本文獻(文獻g)と右記の了解事項のうえに別のあらたな材料を重ねて結論をだす、いわば、付加される部分に導かれて結論に到達するという方法は遵守される。諸説すべてを網羅的に紹介するのは本稿の意図ではないので、以下、付加部のみを抽出し類別化することにより、結論へ到達するメカニズムの一端をあきらかにしておきたい。

はじめにとりあげるのは、蕃や亳関連の地名を重視するケースであ

る。これは、蕃と亳が通じていること、さらにそれらが音韻のうえから博、蒲、薄、番などの文字にも連なる事実を前提とする。そして、蕃や亳関連の文字を含む地名の検討を通じて居地を特定していく。たとえば、陳昌遠氏は、「契居蕃」すなわち「契居蒲」「契居薄」である<sup>20</sup>とみなし、山西省内に「蒲」をもつ地名が多いことを根拠に、「契居蕃」「契居亳」の蕃や亳は山西省南部地域(晋南)に求められるとしている。ただ、同様の手法を用いながら異なる結論に到達している研究者も当然のことながら存在するわけで、王玉哲氏が、河北省中南部と山東省に亳関連の文字をもつ地名や水名が多い状況を事例をあげて説明し自説(東方説)の補強材料としている<sup>21</sup>、などはその代表例といえよう。

二番目に、蕃と砥石を結びつけて論じるケースを紹介する。蕃が砥石といっしょに論じられることはままあるようだが、これは、砥石が契の次にくる昭明の居地であること、また、蕃よりも砥石の方に有効な史料が残されている所以であろう。『淮南子』『墜形訓』の「遼出砥石」(高誘注「砥石山名、在塞外、遼水所出、南入海」)なる記載、ほかに『山海經』『海内東經』や『水經注』『大遼水』などに有用な記事は散見される。乾志耿氏等は、これらの文献史料を根拠に、砥石をまず燕山南北の「幽燕の地」に比定する<sup>22</sup>。そして、蕃の地理的な位置も当然北方に想定されるだろうとしたうえで、先人の研究をも参照しながら、殷民族の故地を遼河上流の老哈河流域もしくは大凌河、灤河上流地域に求めている。ここでは、砥石の分析が重要な付加材料となっているのである。そのほか、乾志耿氏等と同じ結論をもつ金景芳氏も蕃と砥石をあわせて論じ、殷民族の初期活動地を模索している<sup>23</sup>。

三番目は、先人の研究に大きく依拠するケースである。これは、東方起源説となえる研究者が、王国維の学説を強く支持するというかたちであられることが多い。たとえば、王玉哲氏は、亳の地望として六説を紹介し、消去法で他説をしりぞけながら最終的に王国維の山東省曹県北亳説に収斂させる<sup>24</sup>。そして、亳関連の地名が河北省中南部一帯に多く存在するのは、商族が居住地を移動するたびに同じ地名を使用した所以ではないかと推測する。そのほか、楊垂長<sup>25</sup>、楊宝成<sup>26</sup>など東方説を採択する諸氏は、必ず王国維の学説を支持している。

さて、以上にまとめた契関連の論考と比較して、第二代昭明、第三代相土の王都である砥石と商丘は、とりあげられる機会がごく少ないようである。砥石に関しては、契の居地とかかわって、北方説を支持する研究者の考察対象となりうることをすでに述べた。他方、商丘は、商(昭明の第二の遷都地)と絡めて地名を特定する考証がよく行なわれている。そこでは、①商と河北省の漳水の関連性を説く(東方説の王玉哲<sup>27</sup>、河北説の李健武<sup>28</sup>)、②商丘を河南省の商丘県、商を陝西省の商県に比定する(西方説の荆三林<sup>29</sup>)、といった説を代表例として指摘できる。このように、王都をめぐる考察は、初代三王を対象としながら、実際は始祖契の居地に議論の多くが集中している。しかも一様に、「契居蕃」(文獻g)と基本的な二つの了解事項のうえに様々なパターンで新材料が加えられ、それぞれの結論が引きだされてくる。方法論としてみるならば、玄鳥説話の場合と異なるところがないといえよう<sup>30</sup>。

これで、説話(玄鳥説話)と地名(王都)の二本の柱から、基本文献十付加材料Ⅱ結論、という文献史学者の立論メカニズムの骨格を、



おおよそあきらかにしえたと思う。それを受けて次項では、文献と考古資料の關係に發し、兩分野（文献・考古）に共通した殷起源問題の本質に關して若干の私見を述べてみたい。

### III 殷起源問題の本質

前項ではあえてふれることを避けたが、文献史学者による最近の論考のなかでとりわけ目立つのが考古資料の援用である。各研究者が主張する諸説、起源地に想定された具体的な土地名、ならびに、それと關連してとりあげられる主要な考古学文化（遺跡）を列挙してみたい。

王玉哲（東方説）（山東省）〔大汶口文化・山東龍山文化・夏家店下層文化〕

乾志耿等（北方説）（遼西地方）〔紅山文化〕

金景芳（北方説）（遼西地方）〔考古資料は使用しない〕

荆三林（西方説）（洛河・丹江上流域）〔河南龍山文化〕

陳昌遠（西方説）（山西省南部）〔山西省垣曲縣古城鎮遺跡〕

楊堃長（東方説）（山東省西南地區）〔造律台文化（類型）・大汶口文化〕

葉文憲（北方説）（遼西地方）〔夏家店下層文化〕

楊宝成（東方説）（河南省東部・山東省西部）〔後岡類型・王油坊類型〕

李健武（河北説）（河北省中南部）〔考古資料は使用しない〕

李江浙（河北説）（漳河流域）〔漳河型・澗溝型先商文化〕

李 民（西方説）（山西省南部）〔考古資料は使用しない〕

劉 緒（河北説）（河北省中南部）〔考古資料は使用しない〕

考察の対象とした十二名のうち、純粹に文献史料だけをもとに論を構成しているのは四名にすぎず、残りの八名が考古資料を引きあいにだしている。取りあげられた考古学文化、遺跡を一瞥してみると、いずれも文献より導いた殷王朝の起源地と關連の深いものばかりであることに気がつく。そこでは、紅山文化の土製女像、大型建築基壇、玉器を即、文献上の記載や殷王朝の祖型と結びつける事例<sup>(1)</sup>などからも察せられるように、自説にとって有益な發掘成果の取捨選択が行なわれている。しかも、土製女像を女神像、大型建築基壇を祭壇、玉器を礼の象徴物という具合に、遺構、遺物に特定の意味をもたせる、いわば考古学的事実の解釈への読み替えが頻繁にみられるのである。

文献史学と考古学は方法論を異にする学問である。対象とする時代にもよるが、殷代のように同時代の文字史料が少ない時期の研究においては、それぞれの方法にのっとりて結論をだす、そのうえで両者の成果を（比べるのであれば）見比べた方が、結論の適否は別として、筋が通った論証となり、説得力も増すのではないだろうか。論の展開の過程で他分野の材料を混在させそれを論拠のひとつに仕立てることは、自説の補強とみなされながら、水と油を混在させる如く、實際は混乱を招いたり、他の学問分野のところて論証不足が生じたり、したがって、不透明な部分を残すことが多いような気がしてならない。もし混在させるのであれば、水と油を結合させるための新素材の投入、もしくは、それらを包括する次元の高いレベルの別の方法論が必要となってくるのではないか。葉文憲氏が投げかける、多くの歴史研究者

が考古資料の提供する憶測、推測に頼っているとの警告<sup>(32)</sup>は、この観点からも、当を得たものといえるであろう。さらにもうひとつ注意すべきは、それぞれの学問分野において到達した結論に違いがでてもそれはそのまま容認されるべきだ、という点である。異なる方法論を用いたために結論が大きく食い違うことは十分にあり得ることである。むしろ、当然のこととみなしてよいかもしれない。問題は、それぞれの方法論のなかでいかに正当な論の展開が試みられるか否かにつきるであろう。

ここまで、文献学と考古学の学問上の違いをしつかりと見極めてこそ殷起源問題の本質がみえてくるとの立場を強調してきたが、他方において、両学問に共通した前提事項が存在することも事実である。そのひとつとして、張光直氏の考えを紹介してみたい。少々長くなるが引用しておく。<sup>(33)</sup>

古代中国文明の発達史は、これまでずっと信じられてきたような「孤島型」のもの、つまり夏、商、周の三つの王朝が、前の王朝が倒れたあとを次の王朝が継ぐという・・・モデルのものではなかった。今日の三代考古学研究が明らかにした文明の進歩発展様式というのは、「平行並進型」であって、・・・たがいに衝突しあい、たがいに刺激を与えあつて、ともに発展が促進されるといったものであったのである。この三つの国家のあいだの関係は並行的なものであり、夏、商、周三王朝の時代に、おそらく夏、商、周の三つの国がともに同時に存在していたのであって、ただ三者のあいだの勢力の消長が各時代によってちがっていたというだけ

のことなのである（・・・は省略部）。

夏王朝の存否はさておき、いまここで重要なのは、夏殷周三代の王朝が個々完結的に継続して発展してきたのではなく、各王朝がそれぞれの淵源を有し、夏殷周の順番で最盛期をむかえたという認識である。したがって、夏王朝の時代、後に殷王朝を担う民族や文化はすでに別の土地で胎動していたのであり、また、後に周王朝を担う民族や文化も活動をはじめていたことが十分に考えられる。普通、夏殷周三代という表面的な王朝交代を頭に浮かべるが、実は各王朝を担う民族や文化は古くから実在し、三代の歴史は、それぞれの文化が互いに影響を及ぼしあいながら築かれてきたのである。これを張氏は「平行並進型」の発展様式とみなしている。この基本的な認識は、文献学、考古学にかかわらず、殷王朝の起源を考えていく際の共通した了解事項となりうるであろう。

理解を深めるために、もう少し別の角度から考えてみたい。まず、殷王朝の起源といったときにそれが夏殷の脈絡（夏から殷が生じたというような）ではなく、殷に独自の系譜の追跡を意味することは言を俟たない。とすると、殷王朝に先んずる、かりに先殷と呼ばれるような実態をどのように把握するかということになってくる。その際、ひとつの見方として、それは非夏的な存在として規定されるであろう。殷王朝が興る以前にいわゆる夏王朝は存在していた。よって、夏と併存する先殷は、夏にあらざるもの（非夏）として否定的に描くことができる。この、先殷的要素、非夏的要素という認識は、コインの表裏のように、同一実体を別面から照らす視角であり、両側面に光があて

られてはじめて実体があきらかになる、そのようなものと考えてみたい。まさに、先殷の存在は、他者を通じて自己の存在を確認する如く、夏の有り様と深くかわるものではなからうか。ここから先は、文献学と考古学によって進むべき方向が異なる。たとえば考古学の場合、先殷に特有な多鬲（出土土器中に占める鬲の占有率が高い）の考古学文化は、非夏的という立場からすれば、非少鬲の考古学文化とみなされるわけであり、ここに、多鬲と少鬲の考古学文化の相互関係から殷文化の成立過程を説明していく路がひらけてくる。もしかしたら、このような基礎的な認識は、無意識のうちに諸論の前提となっているのかもしれない。しかし、殷が独立発生的に興起したのではなく夏周に代表される諸氏族とのかかわりのなかで育まれてきたこと、（考古学的な見方をすれば）多元的な世界から殷文化が析出され殷王朝が誕生してきたことを、ここでは再度確認しておきたい。

ところで、このような多元世界はどのような構図でとらえることができるだろうか。ひとつは、複数の構成実体が相互に関連された網目（ネットワーク）構造、もうひとつは、多元的な構成体が統括され頂点に収斂するピラミッド型の階層（トゥリー）構造、両極化するならば以上二つのモデルが想定できる。網目構造は突出した存在のない脱中心社会を俯瞰したかたち、階層構造は中心を戴く社会の側面形をあらわすことはいうまでもない。実際は、複数兩種の構造が入り組み重なる複雑な様態を呈しながら社会は動的な自己組織化の道を歩んでいたたのであろうが、ここで模式図的にいうならば、夏殷周の誕生は前者から後者への移行、つまり、網目構造の社会から階層構造の社会へ

変革を遂げた結果生まれた産物として理解できる。別の言葉でいうならば、夏殷周の誕生は、網目的な相互影響のシステムよりも、階層的な上意下達のシステムが重視されるような社会への脱皮としてとらえることができる。そして、階層構造の頂点に立つのが、夏であり殷であり周であるわけである。とするならば、殷王朝や殷文化の起源問題は、社会構造が改変（相転移現象）を果たすメカニズムを説明することにつながる、というよりも、そのプロセスをとらえていくことが最も重要な課題となってくる。そこにおいて、起源地の特定はそれに従属する、あるいはそこから派生する副次的な問題となつてこよう。すなわち、殷の起源地は結果としてあきらかにされるものであつて、主眼をおくべきは、あくまでもどのようなしくみで社会が王朝（文明）の誕生へむけて脱皮していったのか、そのメカニズムの解明である。

ここまできると次なる問題は、必然的に、社会が網目構造から階層構造へむかうプロセスの究明ということになる。しかし、これを検証しはじめると本稿の守備範囲を大きく逸脱する恐れがあるので、簡単な図式を作業仮説として提示するにとどめておきたい。まず、当問題を検討するにあたって、以下のようなステップを考えてみる。①網目構造のなかの構成実体にゆらぎが生じる、②ゆらぎにより発生した無秩序状態を解消すべく新要素の出現が待望され、創出される、③新要素は受け入れられず一旦排除される傾向にむかう、④そこから垂直的かつ中心的な析出がはじまる、以上の四段階である。

①の段階は、網目様に結ばれた特定の構成実体内部（文化内部）に通常とは異なる現象（物質界精神界の両者を含む）が発生する状況を

いう。それをゆらぎと呼ぶ。ゆらぎが生じるにあたっては、内部の矛盾と外部からの影響（後者は構成実体間の相互作用もしくは一方的な浸透作用に起因する）、これら二つの契機を想定することができる。いずれの場合も、実体内部にある種の無秩序状態を創り出すことで共通するが、②の段階で新要素が誕生することを考慮に入れるならば、異質の接触が行なわれる後者の方が可能性は高いであろう。そして、このあらたな要素が中心的な存在となりうるかどうかは、ひとえに、それが初期場面で排除されるか否かにかかわってくる（③の段階）。これは意外であるかもしれないが、人間社会が本来もつ特性として、新要素の排除による自己秩序の活性化を指摘できる。あらたなエレメントは、いわば自己組織化をうながすエネルギー源の役割を果たすわけである。もし新要素として顕現したものがすみやかに受容されるのであれば、それは従来の枠組のなかに位置づけられた（従来の枠組を超えられなかった）ことを意味し、そこからは何の変革も生じない。その要素には中心となる素因がなかったことになる。したがって、中心的存在になる条件として第一に排除されることが肝要なのである。問題は、一旦排除された要素がどうして、またいかにして中心に浮上するのかという点にあるだろう。それに関してはこのように考えたい。排除されるに際しては衆多の賛同が必要となる。新要素が多数により否定されるということは、裏を返せば、それが多数のうえにたつ可能性をも同時に孕んでいる（両義的である）ことを意味しないだろうか（枠内に許容されるような要素では衆多から浮かびあがるための異質性をもちえない）。聖と穢が同一物の表裏となりうるように。そしてそこで

大切なのは、特に古代社会の場合、中心となる存在が他を圧倒、圧殺して生じるのではなく、たとえば王の推戴行為のように、周囲におされるようなかたちで析出してることが仮想される（④の段階）点である。

文明もしくは王朝や国家の誕生を考古学の立場から説明するとき、都市（城壁）、金属器、文字の同時出現をもって判断の基準とすることがある。いわゆる「文明」の段階を経過した社会は、これらの要素なくしては存在しえないような段階に突入した。前段で、網目構造から階層構造へ社会が移行する際、一端排除された要素が中心となるべく析出される旨を述べたが、上記の三要素は、異質なエレメントが浮上し、社会に組み込まれるための不可欠な道具としての役割を果たした可能性である。都市は異質な実体を隔離し他との差異を主張するため、金属器は上位に立つものの象徴物、文字は新要素と旧要素のあいだのコミュニケーションならびに記録（新社会を確立させるための保証）の道具として、それぞれの機能を果たしたことが想定される。文明の三要素は、おそらく質的に異なる世界の誕生と密接な関係を有しており、異質な新要素の中心化はこのような側面から描くこともできるのである。いずれにしろ、階層構造へ社会が推移するメカニズムを念頭において殷の起源問題を論じるならば、問題の本質に少しでも近づくための活路がみいだされるのではなからうか。

本論では、文献に拠る殷起源問題諸説を整理することを通じて、この問題の本質にまで迫るべく論を展開した。そこにおいては、それぞ

れの学問領野固有の方法論に依拠することの重要性を指摘しながら、あわせて、相互に通じる認識基盤の存在を確認するべく模索を試みた。その結果、少なくとも、起源地の特定が当問題の最終的にめざすものでないことだけは指摘しえたと思う。今後は、ここで示した作業仮説をより強固なものとするべく検討を重ね、それを個々の学問領域で実際に生かしていくことが課題となるであろう。

註

(1)『史記』『六国年表』に、「夫作事者必於東南、收功實者常於西北、故禹興於西羌、湯起於亳」という件がみえる。

(2)王国維『觀堂集林卷第十二』所収の「說商」「說亳」等を参照。

(3)傅斯年「夷夏東西說」『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』下冊、国立中央研究院歷史語言研究所集刊外編第一種、一九三三。

(4)拙稿「殷文化成立試論」『古代学研究』一二七、一九九二、註一。

(5)中国の研究者が王朝の呼称として「殷」を使うことはまれである。卜辞で殷人が自称する「商」をそれにあてることが一般化されている。本稿では慣例により基本的に「殷」を使用するが、諸説紹介の際には、原義を正確に伝える意味から、「商」「商族」「商王朝」「商文化」などの用語を、研究者にしたがつて使うことにする。

(6)乾志耿・李殿福・陳連開「商先起源于幽燕說」『歷史研究』一九八五、一五。

(7)彭邦炯『商史探微』重慶出版社、一九八八、四二頁。

(8)ここまでみてきたように、考古学と文献学の方法論はまったく異なる。考古学は殷文化の本質を物質のうえから見極めたいと、ものを頼りに殷文化の系譜をたどることに専念する。そこでは、原則として諸王の名前は登場しない。対して文献学では、記された諸王の事跡こそが最優先されるのであり、同じ殷起源といっても、殷文化ではなく殷王朝（もしくは殷民族）の系譜が問題にされる。このように、考古学の方法論を用いた殷起源の探求と文献学の方法論を用いたそれは、元来異質な次元に属するものである。考古資料に力点をおいた考古偏重型の論考を本稿でとりあげない最大の理由は、ここに存在する。

(9)ここで、考察の対象となる論文を列举しておきたい。

①王玉哲「商族的来源地望試探」『歷史研究』一九八四、一。

②乾志耿・李殿福・陳連開「商先起源于幽燕說」『歷史研究』一九八五、一五。

③金景芳「商文化起源于我国北方說」『中華文史論叢』第七輯、一九七八。

④荆三林「試論殷商源流」『鄭州大学学报』一九八六、一。

⑤陳昌遠「商族起源地望發微」『歷史研究』一九八七、一。

⑥楊重長「試論商族的起源与先商文化」『北方文物』一九八八、二。

⑦葉文憲「商族起源諸說辯析」『殷都學刊』一九九三、三。

⑧楊宝成「商文化淵源探索」『華夏文明』第一集、北京大学出版社、一九八七、所収。

⑨李健武「淺談契、封于商、和、契居蕃」『中原文物』一九八六、三。

⑩李江浙「商族起源新考」『北京社会科学』一九八九、三。

⑪ 李民「關於商族的起源—從《尚書・堯典》說起」『鄭州大學學報』一九八四。

⑫ 劉緒「從夏代各部族的分布和相互關係看商族的起源地」『史學月刊』一九八九・三。

(10) 註9①に同じ。

(11) 註9②に同じ。

(12) 註9⑤に同じ。

(13) 註9⑩に同じ。

(14) 「玄婦方壘」の銘文、器影に関しては、それぞれ、羅振玉『三代吉金文存』卷十二・二・一、容庚『商周彝器通考』下、七八八、を参照。なお、林巳奈夫氏は同型、同銘の壘を「殷後期Ⅱ」の段階に位置づけている（同『殷周時代青銅器の研究』殷周青銅器綜覧一・図版、吉川弘文館、一九八四、二九〇頁、壘一一）。

(15) 王玉哲、乾志耿等の両氏が、同じ夫余、高句麗の起源説話を念頭におきながら異なる結果に到達しているのは、これが、後述する地名（王都）の考察をあわせた総合的な結論であるところによる。

(16) なかには、晋南説を支持する荆三林氏のように、蕃や亳ではなく「商（殷）」に力点をおいて初期活動地の考察を進めていく場合もあるが（註9④）、これは例外といえよう。

(17) 註9①に同じ。

(18) 註9⑨に同じ。

(19) 「蕃」と「亳」が音韻のうえから通じていたことは、丁山氏の説が引かれて主張されることが多い（丁山『商周史料考證』中華書局、

一九八八、一六頁）。

(20) 註9⑤に同じ。

(21) 註9①に同じ。

(22) 註9②に同じ。

(23) 註9③に同じ。

(24) 註9①に同じ。

(25) 註9⑥に同じ。

(26) 註9⑧に同じ。

(27) 註9①に同じ。

(28) 註9⑨に同じ。

(29) 註9④に同じ。

(30) そのほか地名にかかわって、夏殷両王朝の關係（成湯が夏の桀王を討伐する経路）から殷の故地を推測した例（註9⑫）なども見受けられるが、時間の隔たりを考慮に入れるならば、初代三王と同じ組上にのせられるべきものではないであろう。

(31) たとえば、註9②の乾志耿・李殿福・陳連開論文を参照。

(32) 葉文憲「商族起源問題討論述評」『中国史研究動態』一九八八・四、一五頁。

(33) 張光直「從夏商周三代考古論三代關係与中国古代国家的形成」『中国青銅時代』中文大學出版社、一九八二、所収。なお引用文は、同書の訳書である、小南一郎、間瀬収芳訳『中国青銅時代』平凡社、一九八九、七六―七七頁、から採択した。

(34) いま、先殷世界の多元性を、「考古的な見方をすれば」という限

定のなかで述べたが、文献史学界であれだけの異説が主張されている状況をみると、該領域においても先殷期の社会を多元世界とみなしうる素地が内在しているのではないかと強く感じる。文献上、東方、北方、西方といった各所に殷の起源を想起させる要素が発見されるということは、それぞれの方面に殷的な要素が散在していたことのあらわれであるかもしれない。ただし、それらが確実に先殷期の足跡を反映させたものなのか、あるいは殷代になって殷的要素が拡張したその結果が反映されたものなのか、とくに時間的な問題で不明瞭な部は多く残されている。